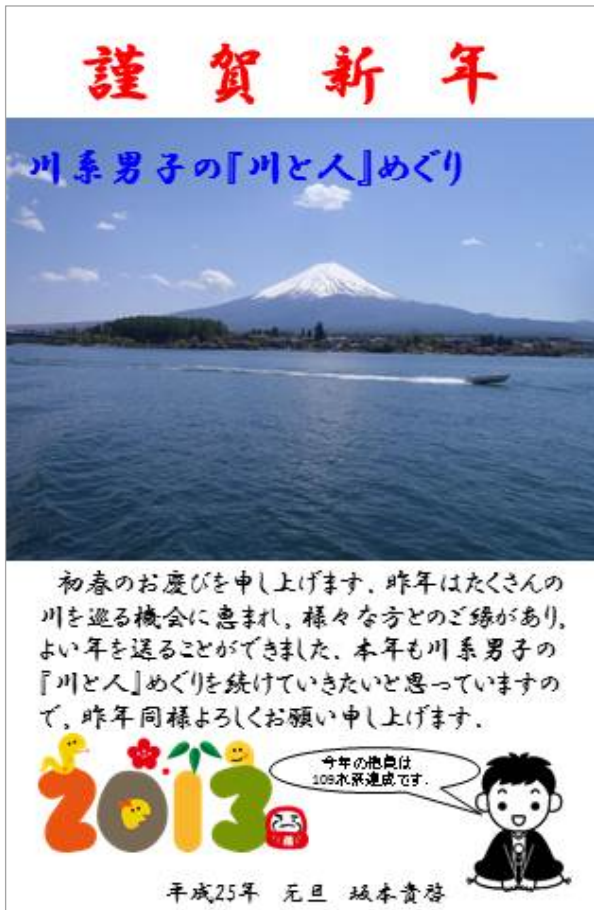


## 川系男子の『川と人』めぐり No. 9～遠賀堀川～

坂本貴啓 (筑波大学大学院 生命環境科学研究科 博士前期課程 白川直樹研究室『川と人』ゼミ)

『川と人』めぐり

研究室のゼミ名『川と人』ゼミという言葉をもじって、『川と人』めぐりのタイトルで連載していきます。テーマは川と人。川が好きではない『川系男子』が川めぐりをしながら、川への思いや写真・動画などをご紹介していきます。



### 1. 川系男子の初夢

遠賀堀川に昔のごとく滔々と水が戻ってきた。寿命の唐戸からは遠賀川本川の水が取り入れられ、中間の唐戸を通り、流れる。河守神社前にはもやい(船着き場)で舟運船の船頭さんがしばし休憩。折尾駅付近の川沿いには赤い梅の花が咲き、洗たくものを終えたお母さん達が川沿いのオープンカフェで温かいお茶を飲みながらしばし井戸端会議。夕方になると、下校途中の学生が堀川の両岸にある学問の神様の菅原神社で合格祈願。折尾のまちはちょっと御利益のある学問のまち。夜になると堀川沿い飲み屋街は仕事を終えたお父さん達で賑わい、川面には飲み屋街の明かりが映り込む。今も昔も変わらない遠賀堀川のロマンあふれる情緒が今ここに蘇った。

そんな初夢に遠賀堀川への想いを馳せる 2013 年でありたい。

### 2. 遠賀堀川を歩く

2012年12月22日～23日に福岡県北九州市の遠賀堀川を歩いた。事のはじまりは、古賀河川図書館の古賀さんからの一本の電話。「遠賀川は日本一の緩傾斜護岸に日本一の河口堰多自然魚道と順調に自然再生が進んでいます。だけど、あと遠賀堀川だけが水が流れるようにどうにかできれば、遠賀川流域は変わると思うんです。河川環境の専門家の白川直樹先生に色々と相談をしたい。」

これをきっかけに白川研究室『川と人』ゼミ内には『遠賀堀川プロジェクトチーム』を新設し、遠賀堀川の勉強会をしながら遠賀堀川の再生に向けて何ができるか地元の『堀川再生の会・五平太』の人らと一緒に考えていくことにした。

その第一弾として、白川先生とともに遠賀堀川に向かった。案内人は『堀川再生の会・五平太』の中村恭子さん。調整役を下さった古賀邦雄さんも一緒に4人で遠賀堀川の河口から起点まで12.1kmを歩いた(図1)。



図1 遠賀堀川全図(折尾駅周辺タウンガイドより)

### 3. 遠賀堀川のあゆみ

#### 3.1 江戸時代の堀川

遠賀堀川は遠賀川水系から分派する河川で、江戸時代1620年に福岡藩藩主の黒田長政の治水政策により、堀川の掘削が始まった。遠賀川から水を分派し、洞海湾の方に水を流すことができれば、洪水対策のみならず、灌漑用水として活用でき、一石二鳥であった。しかし、工事は難航した。特に水巻町の吉田村（当時）の貴船神社付近「宮ノ尾」は非常に強固な岩盤で、ノミやタガネで掘削していた当時の工夫にとっては困難なものであった。また、工事の最中に多数死人が出るなどしたため、貴船神社の祟りと恐れ、強固な岩盤の掘削というだけでなく、工夫の士気も下がってしまい、工事はなかなか進まなかった。困難を極めた工事は何度も中断され、四期183年の年月を経て1804年完成した。完成により、水巻や陣原の村々ではコメの取れ高が2万石以上となり、宝川になったという。

#### 3.2 明治以降の堀川

遠賀堀川が完成し、年貢米や作物はかわひらた（または五平太）と呼ばれる船で運ばれるようになり、舟運が発達した（図2）。近世の終わりごろ（1840年頃）になると、筑豊炭田で掘られた石炭が遠賀堀川を通り、若松から積み出されるようになり、重要な役割を果たした。最盛期には13万艘を越えた川ひらたがあったという。1904年に官営の八幡製鉄所が完成し、筑豊炭田の石炭が供給され、製鉄が行われるようになり、堀川も日本の近代化を支える重要な役割を果たしていたが、1908年に香月線が完成してから遠賀堀川の舟運は急激に衰え、1938年にはかわひらたは遠賀堀川から姿を消してしまった。

（引用：遠賀川下流域河川環境教育研究会（2008）、遠賀堀川の歴史）



図2 遠賀堀川に浮かぶ五平太船

### 4. 現在の遠賀堀川

#### 4.1 洞海湾から遠賀堀川を遡る

22日14:30に黒崎駅に集合。まずは洞海湾沿いの工業地帯を見る。官営の八幡製鉄所が設置されて現在まで重化学工業の工業地帯として発展を遂げてきた。ここから日本の近代化がはじまったと思うと感慨深い。洞海湾沿いを歩き、堀川の河口に到着。堀川の下流の方は広い河川敷が広がり、散歩する人の姿がよくみられる。

#### 4.2 折尾のまちと遠賀堀川

折尾に向けて歩くと、金山川と堀川の合流点に。このあたりはまだ一部剃刀堤防のようなかたちになっている。また、合流点より堀川を遡ると一気に親水性は乏しくなった。川沿いに密着したかたちで住宅も並んでいる。水辺へのアクセスは皆無である。さらにこの堀川の水は遠賀川本川からの水が遮断されているため、フレッシュな流水はない。雨水等を西本陣橋付近の排水機場のポンプ場で止めているため、よどんだ水があるだけだ。

それでも中村さん達はこの周辺の小学校や中学校の子ども達とEM団子をつくり、10年近く川に投げ続けた。するとここ10年でBOD値が約8.0から約2.0まで改善されたという。

一般的に川をよくするために「水を綺麗にしましょう」というのが、水質改善策はある程度効果はあっても、これは根本的な解決にはならないと私は思っている。やはり、川にはある程度の水量が必要で、水量でもって希釈し、常に流れをつくることで水中の酸素を増やし、生物活動を活性化させることが水質改善において大事である。堀川にも『環境用水』の考え方が必要ではないかと思う。『環境用水』については秋山道雄ほか（2012）：『環境用水-その成立と持続可能性-』が明るい。

折尾駅に着いた頃にちょうど日没を迎えた。今日はここまで。折尾駅は折尾駅再開発事業に伴い、2013年1月より工事がはじまる。折尾駅は非常に歴史ある駅舎で、1824年に開業して以来、赤レンガのモダン建築の趣きある駅舎を残してきたが今回その原型を留めつつリフォームが行われる。それに伴い、駅周辺の堀川の付け替え、堀川沿いの飲み屋街の立ち退き等、堀川の視点からみると様変わりが予想される。歴史のあるまちだけに折尾駅の改修を惜しむ声も多い。中村さん曰く、折尾駅周辺の飲み屋街の明かりが映りこむ夜の堀川の景観も非常にいいのだという（写真1）。川の水面には反転した飲み屋の明かりと行き交う人の影が映りこんでいた。





写真1 折尾駅付近の堀川と飲み屋街



写真2 吉田の切貫

### 4.3 吉田の切貫と河守神社

翌日、折尾駅から再スタート。折尾駅付近からどんどん堀川を遡って行く、堀川は折尾駅から延びる福北ゆたか線の線路に沿っていたが、宮ノ尾付近から急に蛇行する。2章でも述べたように、もともとは現在の線路上の貴船神社下を掘ろうとしていたが、立て続けにおこる現場の事故で住民が祟りを恐れたため、栗山大膳がルートを変更した。一度は堀って、とても切りとおせず断念した『大膳堀』のところが今は線路になっていることをしたら大膳も驚くだろう。

『吉田の切貫』付近を通ると鬱蒼とした森になっており、堀川の兩岸の標高が高いことから切り貫いたことが明らかだ（写真2）。堀川の右岸側をみると、ノミ跡が多く刻まれている。当時の大工事の苦労がこのノミ跡の一つ一つにしっかりと刻まれている。吉田の切貫付近を抜けると、開けた河守神社（水巻町）について（写真3）。

河守神社は大山祇命（山の神）、罔象女神（農業用水の神）、興玉命（土地の神）で更に後年、堀川開削工事の恩人福岡藩6代藩主継高を祭った神社であるという（河守神社由緒碑より）。河守神社付近は堀川歴史公園にもなっており、周囲には遠賀堀川の歴史が多く記されている。さらに、神社の鳥居の方向は川を向いており、神社の社の鬼瓦は『水』と刻まれていて、堀川との関連が深い。また舟運の最盛期にはここで休憩をする船頭さんも多く見られたという。

河守神社の存在が堀川の歴史的価値をさらに高めている。古賀さんは「この河守神社を活かした川まちづくりをすることが遠賀堀川の再生につながるでしょうね。」と語った。十分な広い空間もあるので、ここは歴史を活かした川まちづくりが何か考えられそうだ。



写真3 河守神社付近の堀川（神社は左）

### 4.4 無機質な中間付近の堀川

河守神社のある水巻町を抜け、中間市に入った。中間市付近の堀川はコンクリート護岸で、その中に流路があり、川というには少し違和感のある無機質なつくりになっていた（写真4）。さらに管理用梯子がところどころに備え付けられているだけで水際にアクセスすらできない。歩いていても歴史を感じられないのはやはりどこか寂しい。しかし物は見方次第で、白川先生の目は違ったようだ。「これだけ川幅があるなら色々とは絵は描けそうだね。」先生の目には無機質な河川空間の先にある、水際までなだらかに緑が広がり賑わいのある河川空間の絵が視えているようだ。そもそも今回、川沿いを全区間歩こうと提案されたのは先生であった。普通にテクテクと歩かれているだけでも見えるのだが、実はしっかりと川の全区間を見ながら川の総合診断をしていたようだ。福留修文先生の本に『川の外科医が行く』とあったが、白川先生なら『川の精神科医が行く』といったところだろうか。悲観を希望に変えてさらに上流へ歩き続けた。



写真4 無機質な中間付近の遠賀堀川



写真5 交差する堀川と曲川（堀川は鉄板で遮断）

## 4.5 堀川に水が流れない原因

### 4.5.1 その1（岩瀬の伏越）

中間市の岩瀬付近に行き着き、ふと上流をみると驚く光景が目の前に飛び込んできた。なんと急に堀川が終わっている。堀川と曲川が交差している部分で堀川が鉄板で遮られ、上流の堀川と曲川の水が全て曲川のほうへ流れてしまっている（写真5）。川の交差点があるというだけでも驚きなのに、さらに堀川下流行きの水を通行止めをしているのだ。一体どうしてこうなったのか。

歴史を遡れば、このあたりは『岩瀬の伏越』と呼ばれる川の立体交差点であった。逆サイフォンの構造をつくり、堀川の下に曲川を通していた。しかしながら、周囲の炭鉱の掘削により河道の地盤沈下が起こったり、伏越の中にゴミが詰まり、水が流れなくなったりするなどの問題が起こるようになった。結果として出水期には洪水が多発するようになってしまった。

そこでやむなく1986年に伏越を取り外し、堀川を鉄板で区切り、現状の堀川に至るといえるのだ。遠賀川からの取水云々や水利権の前にここで堀川が中断してしまっているのは堀川に正常に流量が確保できない一番の問題だ。一見すると、鉄板を開けてしまえばすぐ解決するんじゃないかと思うが、課題点は多い。もともと伏越構造だった場所で、堀川の鉄板を撤去しても堀川の河床の方が高く、曲川が相当な水位を確保しない限り、堀川に水が流れることは難しいだろう。ここは今後の宿題にとっておきたい。

（※この後、一旦、堀川の踏査を中断して、中間駅から直方駅へ行き、遠賀川水辺館に向かった（11:00～14:00）。水辺館については5章で。）

### 4.5.2 その2（中間の唐戸で水は遠賀川へ帰る）

『中間の唐戸』付近まで到達。この中間の唐戸は2012年で完成から250年を数える県指定の有形文化財である。この唐戸の技術は岡山県の吉井川の唐戸に倣ったものとか。もともとはここから遠賀川本川の水を取り入れていたのだが、砂や泥が溜まり水が取り入れにくくなり、『寿命の唐戸』に取り入れ口を変え、解消されたという。現在ここ歩くと唐戸こそあるが唐戸が必要なほど水は流れていない。唐戸の左岸上流付近では、遠賀川に水が戻っている。黒川と笹尾川の遠賀川への合流のためであるが、堀川に水が流れない原因で考えるとこれも挙げておくべきだと思うので記録しておく（図1）。当時のこのあたりの河道はどうなっているのかまだ調べていないので何とも言えないが当時堀川が機能していた頃と比較したい。

### 4.5.3 その3（笹尾川から分派する堀川が消えた）

黒川・笹尾川・堀川・遠賀川と様々な川があるので、混乱するが、地図をよくみると、上流の堀川は笹尾川と合流して続いている（図1）。中間の唐戸より笹尾川側に少し上流に行くと、笹尾川と堀川が分派して、一旦黒川に流れ込み、中間の唐戸付近に流れているように地図上では見える部分があるが、どうやら違う。分派付近（新堀川）に行くと、笹尾川に流れるだけで水は分派していない（写真6）。さらに草に茂り陸地化が進んでいる新堀川の先には水門があり、閉ざされていて、どうあがいても堀川の水が連続しない。さらに途中から新堀川の河道の上に導水管が通っている。遠賀川から持ってきた水だが、堀川には流れず、管の中を通して水を引っ張っている。問題は山積している。





写真6 笹尾川と堀川(新堀川)の分派点



写真7 堀川の取り入れ口付近で(撮影 古賀さん)

#### 4.6 ゴールに舞う雪(寿命の唐戸)

いくつかの問題箇所を見ながらさらに上流に進んだ。笹尾川と堀川の合流点までやってきた。ここまで来たらゴール地点の寿命の唐戸はもうすぐだ。足も軽くなる。中村さん曰く「白川研究室ではいつもこんなに歩いているの？これは健康になっていいね！堀川を長年やってきたけどこんなに歩いたのは初めて！」だという。いつも車で見ていただけではわからないものが歩くときと色々と見えてくる。

ゴールも近づき足取りも軽くなってきた。あと少しのところまで雪が舞い散り始めた。舞い散るだけでは綺麗だが、風が吹くとひとたび体温を奪っていく。雨にも負けず、風にも負けず、冬の寒さにも負けず、寿命の唐戸まで到達した。確かにここから遠賀川の水が入ってきている。流れもある。きっと遠賀堀川全区間に水が流れるとこんな感じなんだろう。雪の舞い散る取り入れ口付近で記念写真(写真7)を撮り、堀川12kmの堀川行脚の旅は終わった。

#### 5. 夢プラン方式で堀川再生へ

途中、遠賀川水辺館に寄った。栗箸づくりなど新年を迎えるための行事で賑わっていた。そもそもこの水辺館、「夢からできたものだ」と語るのは直方川づくり交流会の座長(水辺館ゼネラルマネージャー)の野見山ミチ子さん。「私達は平成8年から活動を始めて、『遠賀川になにか拠点になる建物があったら楽しいよね』と活動を始めたの。周りからは『馬鹿じゃないかと思われてもへこたれもせず、恥ずかしがりもせず『夢やから』』と思って、『遠賀川夢プラン』(図4)をつくったの。絵を好き勝手描いてそれをもとに提案式を開いて行政に提案し続けたらある時実現したとよ。」野見山さんの言葉には経験に裏付けされた説得力があった。この夢プランについて松木(2008)ではこう評している。「ふるさとの地域や川が、いつかこうなったらいいなあ」というイメージの共有を図ることを目的にしていることにある。さらに、「誰がいつまで」という義務を負わせていない。この戦略的なあいまいさが、多くの関係者の参加を可能にし、自由な発言を引き出すことに繋がっている。

遠賀堀川もきっと同じことができるだろう。関係する行政は北九州市、水巻町、中間市、福岡県、遠賀川河川事務所だが、夢の絵があれば、ユーモラスに合意形成を実現できるだろう。2013年7月27日(土)に『堀川再生に向けたシンポジウム』が予定されているが、それまでに絵を描くことができればシンポジウムはより充実したものになるだろう。そういえば昔、高校生の頃、新聞の正月紙面に『夢見る筑豊』と題し、YNHCのみんなで絵を描いたことがあった(図5)。

当時は空想だからどうにでもなれというやっつけ仕事の的に書いたが、今見ると奥深いものも多い。夢はいつか本当になると信じて2013年の初夢に想いを託したい。

#### 参考文献

- ・遠賀川下流域河川環境教育研究会(2008), 遠賀堀川の歴史, 遠賀川河川事務所, pp.1-22.
- ・中村恭子編(2012), 遠賀堀川とをりを-記録・記憶・そして願い-, 堀川再生の会・五平太, pp23-73.
- ・中村恭子編(2012)折尾駅周辺タウンガイド
- ・河川環境管理財団HP『河川紀行(河川ビデオ)』:  
<http://www.kasen.or.jp/kasenlib/list.html#kyushu>  
(最終閲覧日:2012年12月28日)
- ・松木洋忠(2008),『遠賀川・直方らしい川づくり』,九州技報43号, 社団法人九州地方計画協会.





図4 遠賀川夢プラン（直方川づくり交流会提案）



図5 高校時代に描いた初夢（毎日新聞 2006年1月1日）

【筆者について】

坂本 貴啓（さかもと たかあき）

1987年福岡県生まれ。北九州市で育ち、高校生になってから下校途中の遠賀川へ寄り道をするようになり、川に興味を持ち始め、川に青春を捧げる。高校時代にはYNHC(青少年博物学会)、大学時代ではJOC(Joint of College)を設立して川活動に参加する。自称『川系男子』。いつか川系男子や川ガールが流行語になることを夢みている。

筑波大学大学院 生命環境科学研究科 環境科学専攻 博士前期課程在学中。白川直樹研究室『川と人』ゼミ所属。研究テーマは『河川市民団体における活動量の定量的分析』と題し、河川市民団体の活動がどの程度河川環境改善の潜在力を持っているかについて研究中。最近のお気に入りには川歩きをすること。

